平安時代の硯

（公財）京都市埋蔵文化財研究所 中谷 俊哉

はじめに

日本の硯は、平安時代にその形状や使用形態が大きく変化します。そしてこの変化は、その後の日本の硯に大きな影響を及ぼしました。今回は、なぜそのような変化が平安時代に起こったのか、その背景について平安時代以前・以後の硯と比較しつつ、平安京を主なフィールドにして考えてみたいと思います。

１．日本における硯の変遷

（１）古墳時代後期（６世紀後半）頃

・円面硯の出現→法量多様化

（２）奈良時代後半～平安時代前期（８世紀後半～９世紀前半）頃

・円面硯の法量単調化（図１）

・風字硯の出現→材質・種類多様化（図２）

（３）平安時代中期（10 世紀）頃

・円面硯の消滅

・風字硯の材質・種類単調化

（４）平安時代後期（12 世紀）頃

・風字硯の消滅

・長方形硯の出現→法量小型化（図１）

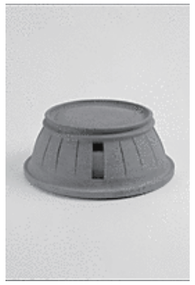

写真１
圏足円面硯
（平安宮内裏
内郭回廊出土）

写真２
蹄脚円面硯
（平安宮中務省
出土）

写真３
宝珠硯
（平安京右京
出土）

写真４
風字硯
（平安京西市
出土）

写真５
長方形硯
（臨川寺出土）

写真６
四葉硯
（白河街区跡・
吉田上大路町
遺跡出土）

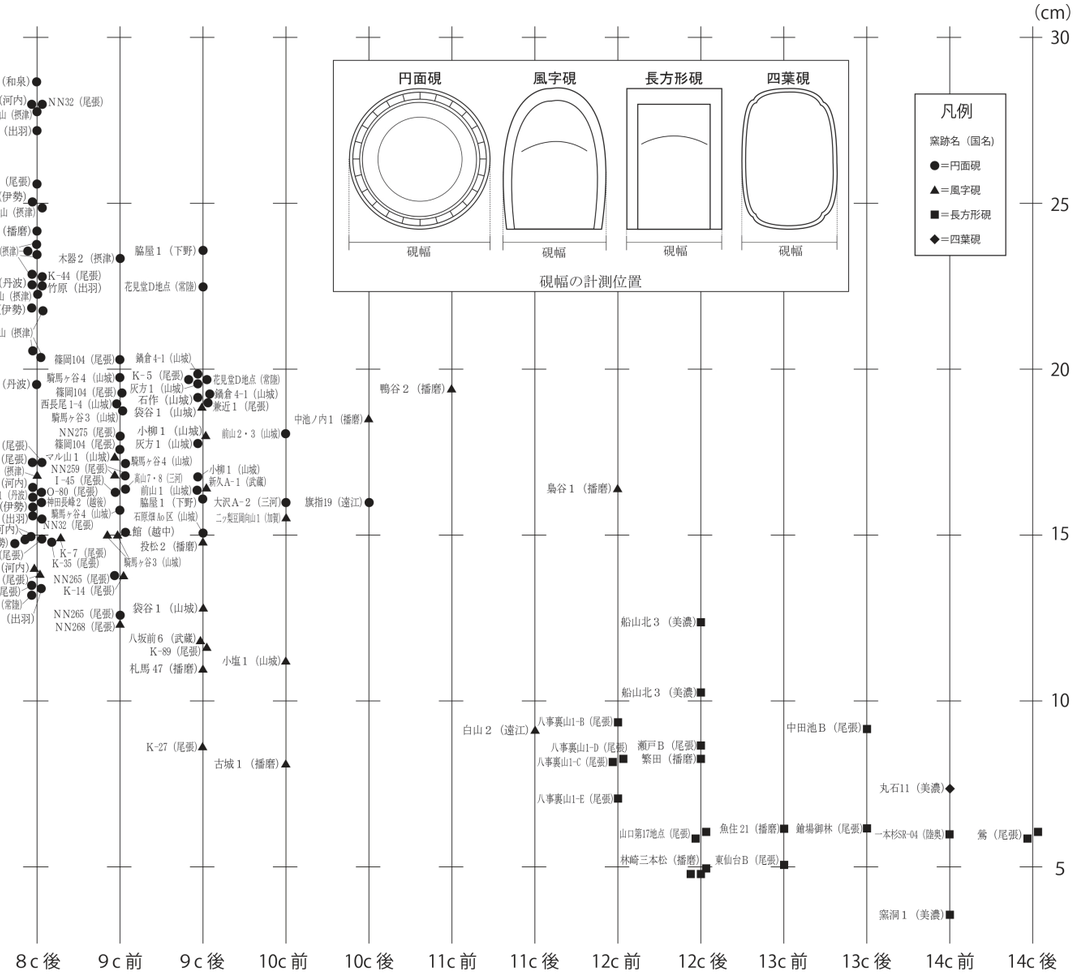

図１　全国生産地資料からみた須恵器硯幅の時期的変化

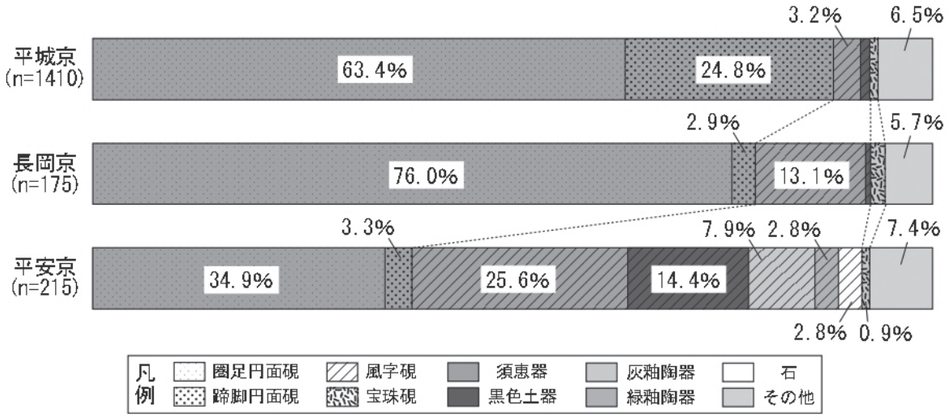

図２　都城ごとの陶硯出土比率

２．法量単調化（平安時代前期）→小型化（平安時代後期）

（１）文献・絵画史料からみた変化の要因

・何かに規制を受けて変化した可能性があるのではないか？

→硯の使用場所（机など）や収納方法（硯筥など）に変化が生じた可能性はないか？

①使用場所

・『延喜式』木工寮９条に太政大臣から五位までの役人が使用する机の大きさに規定があり、机の大きさは位に比例する。

・14 世紀代の絵巻ではあるが、畳の上に硯筥を直置きする例、文台・机・付書院に硯筥を置く例などがある。

→使用場所の空間の大きさは様々であるため、使用場所が硯の法量を規制したとは考えにくい。

②収納方法

・９世紀前半に「硯筥（すずりばこ）」が初めて史料上に見える（表１）。

・11 世紀後半以降、硯・水滴・刀子・筆・墨の５点セットを収めた硯筥が史料上よく見られる（表１）。

→硯筥の出現によって、硯の法量が規制を受けたのではないか？

（２）硯筥とは

・柳筥（楊筥とも）、黒塗筥（蒔絵を施した筥）など種類がある。

①柳筥（図３）

・柳の組木細工で作った筥。筥の大きさにより用途は様々で、使用方法の１つに硯筥がある（宮内 1990）。

・法量は、『延喜式』内匠寮別記に１尺以上、１尺６寸以下の規定があることが記されているが、『延喜式』主計上別記では長さ２尺２寸のものがみられる。

・『徒然草』（14 世紀半ば成立）第 237 段の記述から、柳筥の蓋の上に硯・筆・紙を置いたことが分かる。

・『法然上人絵伝』巻 29（1308 ～ 1310 年成立）では、柳筥の蓋の上に硯・水滴・墨・筆・刀子を置く（図４）。

②黒塗筥

・絵画史料に事例あり（『源氏物語絵巻』夕霧（1140 年）など）

	非消耗品				消耗品			備　考
	硯筥	硯	水滴	刀子	筆	墨	紙	
『正倉院文書』(写経所)（８世紀後半）		○			※	※	※	硯は写経堂備品として備え付け ※筆・墨・紙は事業に応じて支給
『内裏式』（任女官式など）（821年成立、833年補訂）	○	(○)						硯筥の初見
『安祥寺伽藍縁起資材帳』（871年）		○	○					稠桑紫石硯瓦、点硯水瓶子 東寺の所蔵品、蔵に保管か
『延喜式』内蔵寮39条(宴会文人)（927年成立）					○	○	○	文台あり 硯筥・硯は保管先が異なるか
『延喜式』内蔵寮40条(内宴儲料)（927年成立）	○	○			○		○	革筥・楊筥(硯筥) 硯筥・硯は保管先が異なる
『延喜式』図書寮12条(行幸)（927年成立）		○	○		○	○	○	銀小瓶(水滴) 行幸時の硯案に付属
『後二条師通記』（1093年）寛治7.11.20条(除目)	○	○	○	○	○	○	※	柳筥(硯筥) ※続紙は持参、硯筥に収納しない
『中右記』（1093年）寛治7.12.27条(除目)	○	○	○	○	○	○	○	柳筥(硯筥)、硯瓶(水滴) 続紙も柳筥に収納している
『法性寺御殿記』（1119年）元永2.2.17条（着陣）	○	○	○	○	○	○		黒塗筥(硯筥)、瓶(水滴)
『源氏物語絵巻』夕霧（1140年）保延6	○	○	○	○	○	○		長方形硯、筆架、蒔絵の硯筥 柄付きの墨

表１　文献資料にみえる文房具のセット関係

（３）硯筥と硯の法量比較

・絵図（図４）中の硯筥蓋・硯・畳との比較から、硯筥として利用された柳筥の大きさは、長さ１尺２～５寸程度のものである可能性が高い（図５）。

→長さ１尺２～５寸程度の柳筥には、奈良時代後半の大型円面硯は収まらない（あるいは収まっても他の文房具が入りきらない）が、平安時代前期以降の硯であれば収まることになる。

（４）小括

・平安時代前期における硯の法量単調化は、硯筥の出現によって規制を受けた結果である可能性がある。

・平安時代後期における硯の法量小型化については、硯筥定着の動き（各種文房具のセット関係の固定化）に連動する可能性がある（表１）。

→除目や着陣などの儀礼で使用するにあたってセット関係が固定化されていったか？（参考：図６）

・14 世紀代の絵画史料を取り上げて比較を行った点は課題として残る。

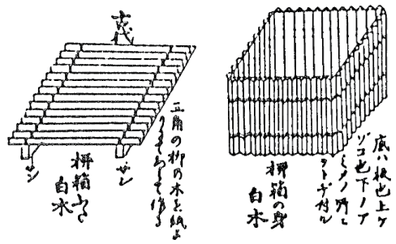

図３　柳筥の蓋（左）と身（右）（宮内 1990 より引用）

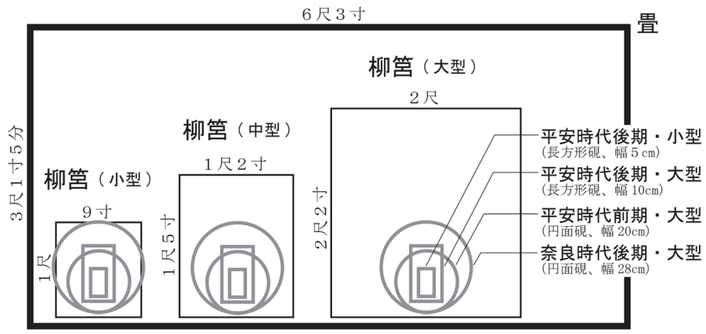

図５　畳・柳筥・硯の大きさ比較

図４　柳筥蓋に置かれた文房具（『法然上人絵伝』巻 29（14 世紀前半）、史料の一部を筆者トレース）

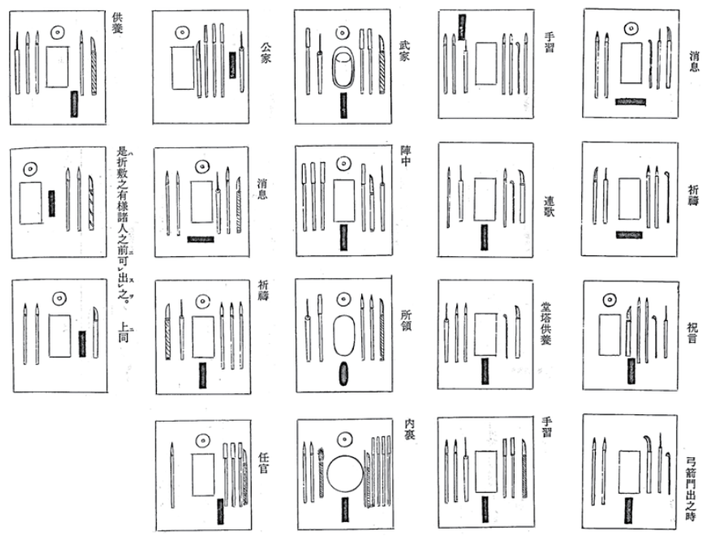

図６　儀礼ごとに異なる文房具の配置（『愚子見記』（1683 年）、原図を一部改変）

３．材質・種類多様化（平安時代前期）

（１）石製風字硯……平安京内２地点（※１町＝１地点として計数、以下同じ）、ともに邸宅からの出土。

（２）緑釉陶器風字硯……平安京内４地点、邸宅からの出土が多い。

（３）黒色土器風字硯……平安京内 23 地点、邸宅からの出土が多く、官衙からの出土は基本的にみられない。

（４）灰釉陶器風字硯……平安京内 15 地点、邸宅からの出土もあるが、官衙からの出土が目立つ。

（５）須恵器風字硯……平安京内では多数出土、邸宅・寺院からの出土もあるが、官衙からの出土が目立つ。

（６）材質・種類と出土地点の相関関係

・石製、緑釉陶器……身分の高い人物の邸宅から出土。

・黒色土器……身分の高い人物の邸宅、天皇関係の施設、寺院から出土。

・灰釉陶器、須恵器……身分の高い人物の邸宅、天皇関係の施設、寺院、官衙、市から出土。

↓

・天皇関係の施設では出土しないような高価な石製・緑釉陶器硯が、貴族邸宅からは出土する。

・天皇関係の施設では出土する安価な黒色土器硯が、官衙や市からは出土しない。

→材質・種類の等級と出土施設の等級が比例しない。使用場所による材質の使い分けが想定される。

↓

・想定される使い分けの状況（表２）

①身分の高い人物の邸宅では、個人的な特注品と考えられる石製（輸入品か）、緑釉陶器硯が使用される。歌会などの催しでは、身分に合わせて多様な硯が使用される。

②天皇関係の施設や寺院では、宮中行事・宗教行事において伝統的な硯を中心に使用される。

③官衙や市では、公文書作成など実用に即した灰釉陶器・須恵器硯が専ら使用される。

（７）小括

・平安時代前期における硯の材質多様化は、階層性の明示のために生じたと考えられる。ただし、京内全域で一律の明示方法があるわけでなく、使用場所によって少しずつ異なる可能性がある（表３）。

・階層性の明示は、奈良時代では硯の法量の大小でなされていたが（松田 1997、神野・川越 2003）、平安時代になると材質･種類の違いでなされることになる。この点から､平安時代前期における法量単調化（前章）と材質多様化の現象は、連動している可能性がある。

・円面硯にも使用場所による種類の使い分けが想定される（表２）。ただし円面硯と風字硯の関係性は不明。

		私有空間		儀礼空間		行政空間		
		斎宮邸宅	貴族邸宅	内裏後院	寺院	宮内官衙	宮外官衙	市
風字硯	石製	○	○					
	緑釉陶器	○	○					
	黒色土器	○	○	○	○			
	灰釉陶器	○	○	○	？	○	○	○
	須恵器	○	○	○	○	○	○	？
円面硯	灰釉陶器	？	○					
	須恵器	○	○	○	○	○	○	？

表２　材質・種類と出土地点の相関関係

①私有空間（斎宮邸宅、貴族邸宅）	石製―緑釉陶器―灰釉陶器―黒色土器―須恵器
②儀礼空間（内裏、後院、寺院）	灰釉陶器―黒色土器―須恵器
③行政空間（宮内・宮外官衙、市）	灰釉陶器――――――須恵器

※円面硯との関係は不明

表３　風字硯の材質が示す階層性（想定）

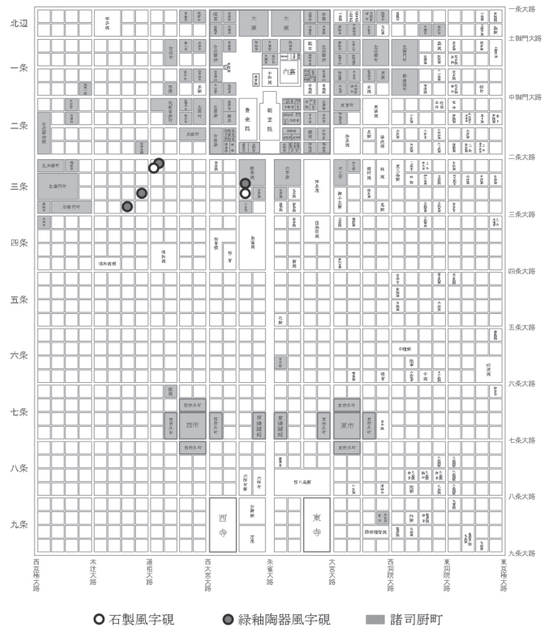

図７　平安京における風字硯の分布①

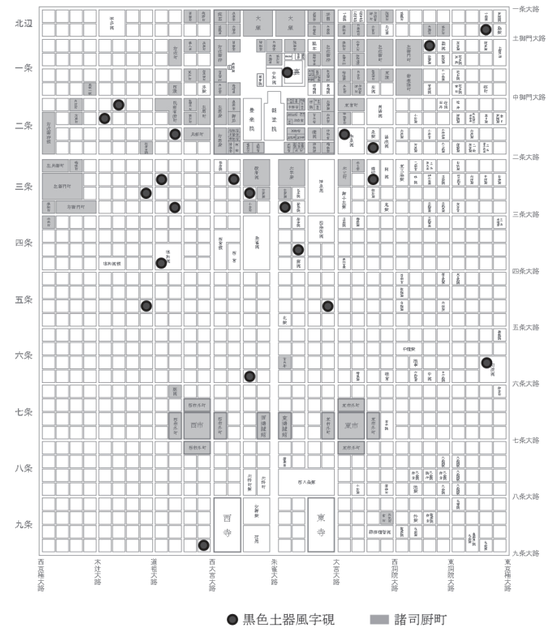

図８　平安京における風字硯の分布②

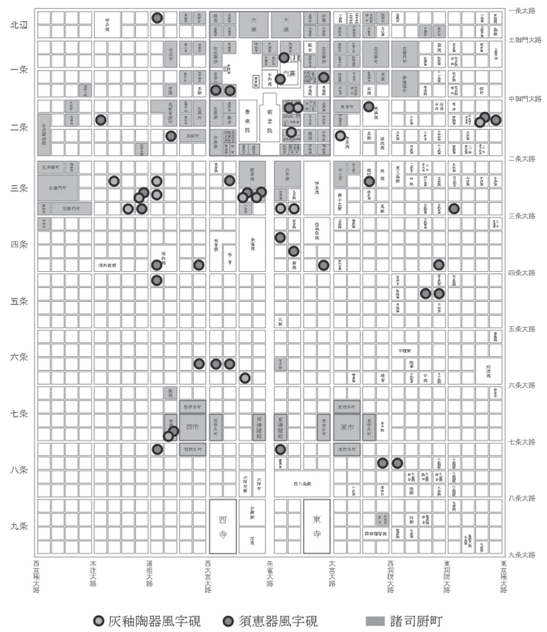

図９　平安京における風字硯の分布③

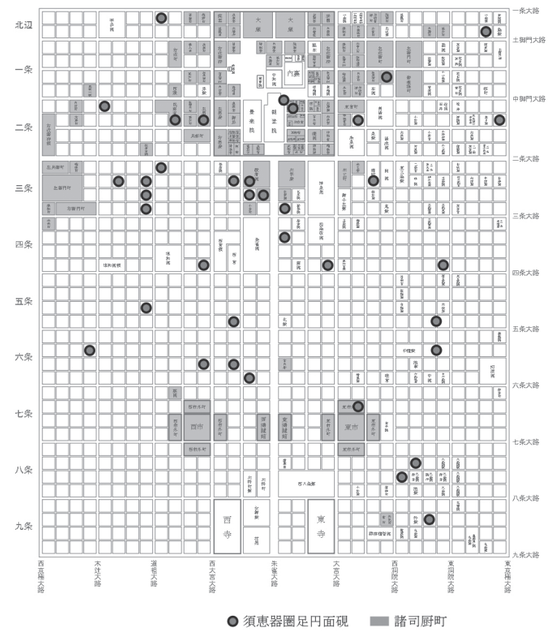

図 10　平安京における圏足円面硯の分布

４．種類単調化（平安時代中期）

・10 世紀以降、平安京の食器類からも緑釉陶器、次いで黒色土器、灰釉陶器が欠落していくので、これら種類の硯も姿を消すと考えられるが、資料数が少なく不明な点が多い（表４）。

（１）緑釉陶器硯

・４点中３点が遺構に伴う資料で、その廃棄年代は９世紀前葉～後葉。９世紀代で姿を消すのかもしれない。

（２）黒色土器硯

・ほとんどの資料は、廃棄年代が 10 世紀中葉を下らない。

（３）灰釉陶器硯

・ほとんどの資料は、廃棄年代が 10 世紀代を下らない。

（４）須恵器硯

・平安時代後期になっても平安京内から少量出土しているが、具体的な分析は今後の課題。

・なお、この時期の須恵器硯は、生産地での出土が全国的にみてもほとんど確認できない。

（５）小括

・10 世紀頃までに緑釉陶器、黒色土器、灰釉陶器硯が姿を消す可能性が考えられるが、資料の不足から明確でない。

・なぜ姿を消すのか、またその後にそれらを補完する硯は出現したのか、あるとすればどのような材質・器形のものなのか、課題は山積している。

５．まとめ

日本における硯の変遷について整理を行い、平安時代の前期・中期・後期に硯に変化がみられることが分かった。今回はその各々の変化について平安京を主なフィールドとして分析を行い、なぜ変化が起こったのかについて考えてみた。

（平安時代前期）

・黒色土器に続いて、緑釉・灰釉陶器生産が始まったことで、各種類の風字硯が生産された。これにより、材質による階層性の明示が可能となり、法量による明示が不要となったと考えられる。

・円面硯の法量が単調化し、硯筥という概念ができたと考えられる。

（平安時代中期）

・緑釉陶器硯に続き、黒色土器・灰釉陶器硯が姿を消す。円面硯も姿を消す。種類も器形もシンプルになる。

（平安時代後期）

・儀礼で使用するにあたってセット関係が固定化されていったことで、硯筥の法量に規定が生まれ、それに伴い硯の法量も小型化した可能性がある。

［参考文献］

財団法人古代学協会・古代学研究所『平安京提要』 角川書店　1994 年

神野　恵・川越俊一「平城京出土の陶硯」『古代の陶硯をめぐる諸問題―地方における文書行政をめぐって―』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所　2003 年

松田留美「長岡京出土の陶硯」 平成７年度財団法人向日市埋蔵文化財センター年報『都城』８　1997 年

宮内　悊「柳筥考―柳筥にみる伝統技術の継承と発展」『デザイン学研究』80 号　1990 年

石製風字硯

	出土遺構	遺跡と所在地の性格	出土遺構の年代
①右京三条一坊六町	池250第３層	藤原良相邸（西三条第）	９世紀
②右京三条二坊十六町	野寺小路川	斎宮の邸宅	11世紀中葉 ～12世紀前葉

緑釉陶器風字硯

	出土遺構	遺跡と所在地の性格	出土遺構の年代
①右京三条一坊七町	土坑41・49 （江戸時代土取穴）	穀倉院推定地であるが湿地状遺構が広がる	江戸時代
②右京三条二坊十六町	池１	斎宮の邸宅	９世紀後葉
③右京三条三坊三町	湿地状遺構SX07		９世紀中葉～後葉
④右京三条三坊五町	溝SD19	一町規模の大邸宅	９世紀前葉

黒色土器風字硯

	出土遺構	遺跡と所在地の性格	出土遺構の年代
①平安宮　内裏登華殿	溝45	内裏登華殿	９世紀
②左京北辺四条六町	溝EB45	藤原良房邸（染殿）の北辺溝	10世紀前半
③左京一条三坊九町	不明	土御門烏丸内裏推定地	不明
④左京二条二坊三町	SD１・２、溝38	嵯峨上皇後院（冷然院）の北辺溝	９世紀前葉
⑤左京二条二坊十二町	第５遺構面整地土	藤原穏子御所（二条院）推定地	11世紀前葉～中葉
⑥左京三条一坊四町	不明	奨学院推定地	不明
⑦左京三条二坊十町	層1195	藤原基経邸（堀河院）	不明
⑧左京四条一坊六町	１号トレンチ第Ⅲ層		不明
⑨左京五条一坊十四町	SD162	後院推定地	10世紀後半
⑩左京六条四坊十一町	南側溝406か	源融邸（河原院）推定地	平安時代前期
⑪右京二条二坊十一町	溝１上層		９世紀
⑫右京二条三坊九町	SD-90		10世紀前葉～中葉
⑬右京二条三坊十五町	不明		不明
⑭右京三条一坊六町	池２、池250	藤原良相邸（西三条第）	９世紀後半
⑮右京三条一坊十町	SE80		９世紀中葉
⑯右京三条二坊十二町			
⑰右京三条二坊十五町	２区		不明
⑱右京三条二坊十六町	池１	斎宮の邸宅	９世紀後半 ～10世紀中葉
⑲右京三条三坊三町	湿地状遺構 SX07 溝157	調整池から溢れた水を流す溝か	10世紀中葉
⑳右京四条二坊十三町	第３層	淳和院	９世紀後葉以前
㉑右京五条三坊三町	溝２・３	小泉庄（摂関家所領）	10世紀前葉～中葉
㉒右京六条一坊五町	土器溜O019	プレ寝殿造に伴う土器溜り	９世紀前葉
㉓右京九条二坊四町	土坑１	土器投棄穴	平安時代中期

灰釉陶器風字硯

	出土遺構	遺跡と所在地の性格	出土遺構の年代
①平安宮　民部省		民部省	
②平安宮　陰陽寮		陰陽寮	
③左京二条二坊三町	溝38	嵯峨上皇後院（冷然院）の北辺溝	９世紀
④左京二条四坊十町	井戸2097		10世紀後葉
⑤左京三条一坊四町	不明	奨学院推定地	不明
⑥左京三条一坊五町	不明	勧学院推定地	不明
⑦右京三条一坊三町	SX283	右京職	９世紀前半 ～10世紀
⑧右京三条一坊六町	池370 第２層	藤原良相邸（西三条第）	９世紀
⑨右京三条二坊十四町	精査中		不明
⑩右京三条二坊十五町	井戸604		９世紀半ば
⑪右京三条三坊三町	ピット342		平安時代
⑫右京三条三坊五町	溝80B、溝810・832	一町規模の大邸宅	９世紀前～中葉
⑬右京三条三坊十町	包含層		不明
⑭右京六条一坊五町	溝F40 １層		平安時代末期 ～鎌倉時代
⑮右京七条二坊十二町	B区3層、C区SE3・SD5	西市外町	10世紀前葉頃

須恵器風字硯　※主要資料のみ掲出

	出土遺構	遺跡と所在地の性格	出土遺構の年代
①平安宮　内裏内郭回廊		内裏内郭回廊	
②平安宮　内裏蘭林坊	不明	内裏蘭林坊	不明
③平安宮　内匠寮	溝29　第２層	内匠寮	平安時代後期初め
④平安宮　中務省	溝３（西限築地西側溝）	中務省	９世紀前半
⑤平安宮　造酒司		造酒司	
⑥平安宮　左兵衛府		左兵衛府	
⑦左京二条二坊九町	池SG１-A	高陽院 ※いわゆる猿面硯（定型）で、蒔絵を施す。脚部は別作り。	平安時代
⑧左京三条二坊十町	土坑904ほか	藤原基経邸（堀河院）	16世紀末 ～17世紀前半
⑨左京三条四坊四町	土坑85	高倉宮 ※いわゆる猿面硯（定型）	11世紀後葉 ～12世紀前葉頃
⑩右京三条一坊三町	SX283ほか	右京職	
⑪右京三条一坊六町	池250第１層	藤原良相邸（西三条第）	９世紀
⑫右京四条二坊十三町	SD196Bほか	淳和院	９世紀中葉～後葉
⑬右京七条二坊十二町	B区3層	西市外町	不明
⑭仁和寺　僧坊	SD30ほか	仁和寺僧坊	平安時代中期
⑮仁和寺　院家	３区　土坑	仁和寺院家	不明

表４　　風字硯集成表